



王
三
郎

日蓮聖人の伝記は古今にわたつて二百種以上ありますが、画伝では聖人滅後二百年余り後の室町時代に出た「註画讃」が最初のもので、江戸時代には数々の画伝が出ており、また別に有名な広重や国芳そのほか当代一流の画師の筆になる版画が版行されていて、それらは今では非常に珍重されています。

いつばんに伝記には確かな材料に拠る研究的な史実を説いたものと、口碑や俗説をまじえた伝説をとり入れたものとの二通りに大別することができます。

そして口碑や伝説は時代が降るにつれて大きく粉飾されてゆく傾きがあります。聖人ご自身の書きのこされたものには、家系や懐胎の時の夢物語や誕生の奇瑞のことなどはありませんが、註画讃などには、父は遠江の国主、貫名重実の次男重忠といい、聖武天皇の末孫で、母は清原氏の娘で梅菊といつたと伝えてあります。平安末期から鎌倉初期のわが国の内乱や世相はここに改めて言うまでもないところですが、聖人が胎内に宿られた承久三年（一一二二）には「承久の姿」があり、その結果、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇が、それぞれ隠岐・阿波・佐渡の島々へ流されるという一大不祥事件がおこりました。日輪が蓮華に乗つて母の懐に入つた夢を見て聖人を娠んだということは、世相の闇を照すという寓意と、日蓮という名に因んでの吉兆としたものと考えられます。しかしまた毎朝立のぼる日天をおがみ念誦された母が、靈夢を感じられたことはありえたことでもありましょう。

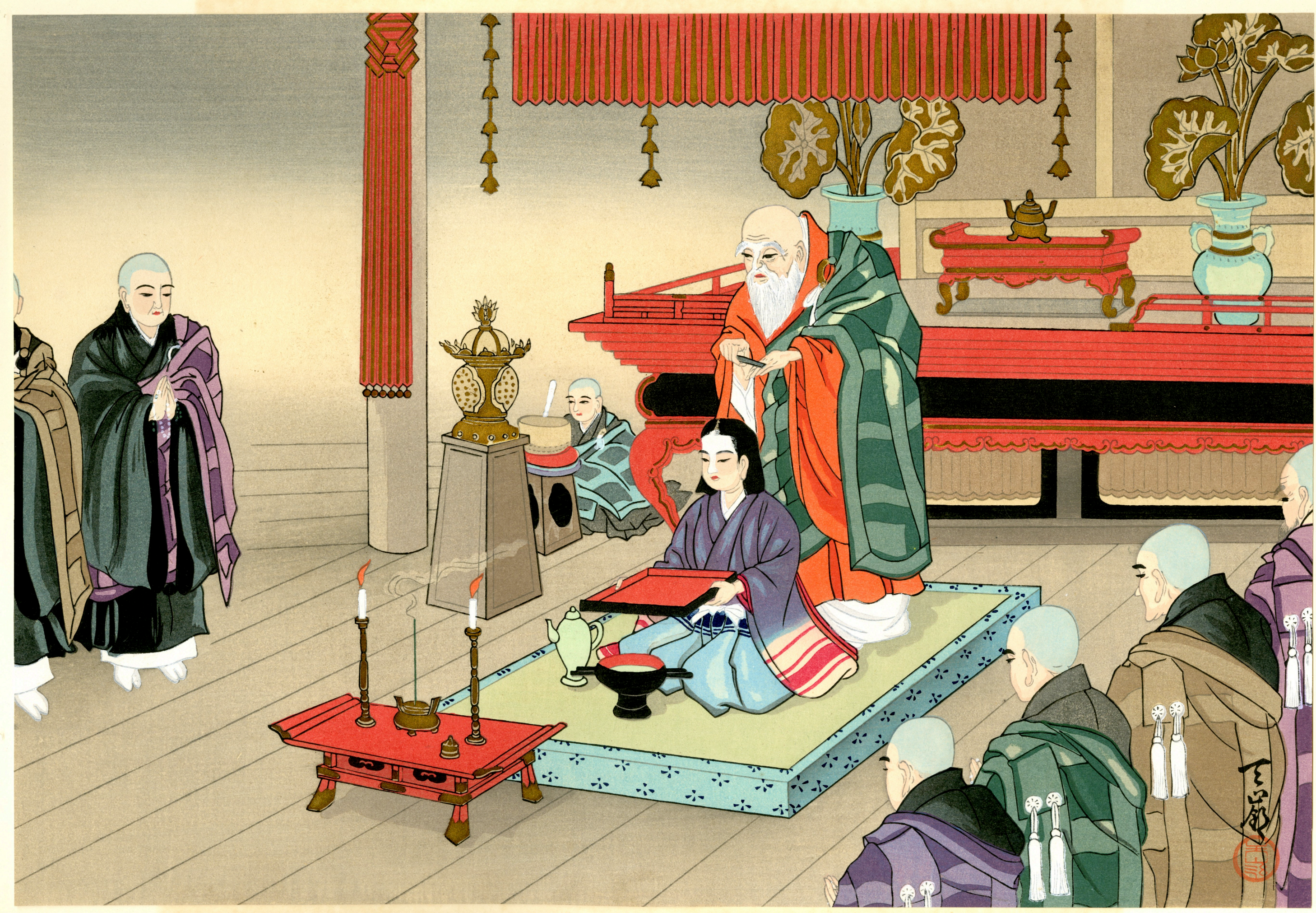


貞応元年（一二二二）二月十六日に日蓮聖人は安房国（千葉県安房郡）小湊に誕生されました。

仏教には末法という時代思想があります。そして「時」と「教法」とが相互に深い関係があると教えられています。その末法という時代はいつからでありその時の教法はどのような教えが行われなければならないのかということが大切なことなのです。末法の時になると乱世になり、人心が悪くなる。だから末法には、重病人には特效薬を服まさないければ効能がないのと同じように、最も勝れた教えでなければ衆生を教化することはできないというのが仏説です。わが国では古くから平安末期の永承七年（一〇五二）を末法の初年として算定しています。それによると聖人の誕生は末法に入つて百七十一年目に当たります。

聖人はご自身が仏の使いであるという使命を痛感されたのは、末法に経王の法華経を弘めることの重大な任務を思われたからです。末法万年の暗を照らす仏の御使、法華経の行者の誕生に蓮花が時ならずして花を開き、にわかには清泉の湧き出るといふ瑞祥は別段に不思議ではないともいえますしよう。

伝記には聖人誕生の朝、小湊の浦に白蓮花が花を開いて里人を驚かし、産室の庭に清水が湧き出したと言い、聖人産湯の水はこの清泉を汲んで用いたと伝えられています。かくて聖人は末法の初めに、安房の漁村の民家に生を受け、幼名を善日磨と名づけられました。



(三) 出家得度

善日麿は数え年十二のときに、両親の膝もと離れて清澄山に登り、寺主道善房について出家し、学問修行の生活に入ることになりました。

清澄山は安房。天津の北峰の名刹で、この寺の像起によると奈良時代の末、宝龜三年（七七二）に不思議法師がここに来て、山中の柏の木で虚空藏菩薩像を作つて寺を開いたのが始まりで、その後しばらく衰微していたのを承和三年（八三六）慈覚大師が此所を道場として中興した山であると伝えられ、鎌倉時代には天台慈覚の流れを汲む寺でありました。

少年善日麿は清澄に登つて名を葉王丸と改められました。その出家の動機は両親の囑望とか遇然の機縁によつてした他動的なものではありませんでした。少年の胸にわだかまる、解かうとして解き切れない疑問をただいたための自ら進んでもとめた意志的な出家であつたのです。このことは、晩年聖人の消息にたびたび述べられているところによつてうかがい知ることができます。その葉王丸の懐いた大きな疑いとは何であつたか。それは国家社会におこつた事件に対する疑いと、人心を導く教え、すなわち仏法についての疑いによるものです。遠くは寿永の乱に幼帝の悲運があり、近くは上皇遠流の承久の乱があつたが、このやうな名分の乱れは何によつて起つたのであらうか。国を治める法は正しく行われているのであらうか。仏法は八宗十宗とあるがそれは何故なのか、仏の真意はどこにあるのであらうか。という二つの疑問の解決を志しての出家であつたのです。

純情で聡明な少年葉王丸は学問勉強に専念すること四年、この間に人にも尋ねたが疑問は解決されぬままに、道善房を導師として剃髮得度の式が挙げられました。



丁巳



(四) 虚空藏菩薩の靈驗

身に余る大きな疑問を懐いて出家した薬王丸は、その解決の緒をもとめ、寝食をわずれて、法門の学問に没頭されました。

清澄寺には、政子寄進の一切経があり、ほかに単行の典籍も少くなかつたようですが、仏典を読んで仏の真意を知ることが凡智をもつてしては、なかなか及びがたいところです。仏典は数多く、仏説は多岐です。一切経を正しく見、批判するには秀れた智者でなければかなわぬことです。

入山直後の少年薬王丸は、思いをここによせて、「日本第一の智者となしたまえ」との大願をおこし、その願いを、智慧を授ける本尊として知られている清澄寺の虚空藏菩薩にむかつて、熱心な祈願をはじめました。祈願の日数については諸伝まちまちで、三七日も百日とも、あるいは数日ともあつてはつきりしませんが、虚空藏菩薩に智慧を祈られたことは、聖人みづから述懐されているところで、かくれない事実です。熱心な祈願は智慧の宝珠を受けるという靈驗となつてあらわれました。み堂の前で祈願をこめるうち、夢うつつうちに虚空藏菩薩から、明星のような智慧の宝珠を授けられ、このことがあつてから経論を見る眼は格段にさえて、各宗の大綱をほぼ伺うことができたとき記されています。

伝えるところによると、薬王丸はその時意識を失つて階段のかたわらに卒倒し、血を吐いて、あたりの笹を血に染めたといい、「凡血の笹」とよばれているのがその名残であるということです。

「ただ法門をもつて邪正をただすべし、利根と通力とはよるべからず」とも、「智者にわが義、破られずは用いじ」とも言われて、法門と経釈に依つて正法、法華経を宣揚された聖人は、まことに日本第一の智者でもあられたので

す。



三
宗



(五) 叡山遊学

葉王丸は出家してその名を是生房蓮長と改めましたが、そのころには仏教初歩の常識をわきまえ、世間の学問にもひととおりの見解を持つまでに成長されました。しかし、日本第一の智者となるには清澄山での勉強でこと足りるはずはなく、学問の中心地に出て一層の勉強をはげむことになりました。

蓮長の最初の遊学の地は鎌倉で、ここでは法然系の浄土と栄西の臨済禪を究め、次いで叡山に遊学されることになりました。

比叡山は仏教の最高学府で、日本仏教は叡山を母胎として発生したものです。比叡山にはひとくちに三千の学侶と言われる大ぜいの学侶がいました。蓮長は二十二歳の寛元元年（一二四三）郷里を離れて遠く叡山に登つて研学の功を積むことになりました。蓮長はここで有名な学侶、大和庄俊範について学び、東塔無動寺ヶ谷の円頓房の主となり、後には横川よかたの華光房を兼ねたと伝えられています。華光房というのは今の定光院の前名で、今も定光院は聖人の遺跡として知られているところです。「十二・十六の年より三十二に至るまで二十余年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国々寺々あらあら習い回り」と述べられているように、青年僧蓮長は二十二歳から三十二歳の春まで比叡山を中心として京の東寺や仁和寺やその他の諸寺を訪ね、高野山、大阪の天王寺、三井の園城寺さらには奈良にも出かけて仏の真意、仏教の実義を求めて、顕密諸宗の教えを学ばれました。

聖人の教えは青年期の心魂を打ち込んだ、深い学問的研鑽の上に打ち立てられて、忘れることを忘れてはなりません。



心齋



(六) 開宗宣言

建長五年(一二五三)四月二十八日は立教開宗の日であります。この日、聖人は清澄山の一角、旭の森に立つて立ち昇る太陽に向つて南無妙法蓮華經の題目を唱えて開宗を宣言したと伝えられています。

青年僧蓮長が精魂を尽して仏教を習い究めたのは、仏のまことの教えを知るためであり、それによつて宗教としての信仰を確立するためでした。二十余年間にわたる勉強求道の結果は教法としての法華經歸一の信仰を確立されました。回顧してみると、法華經を依經とする天台宗があり、ほかにも法華經を誦誦する教団はあるが、信仰対象の本尊、行儀形式ともに法華經に徹した宗団はすでになく、形式的にあるものは何れも雜亂し、本末を忘れた信仰でありました。肝心の天台宗は慈覚・智証・恵心等の後人によつて乱脈におちいり、叡山も真言密教の山となりはてて、天台・伝教の真意からは遠く離れてしまつていることを蓮長は慨嘆せずにはいられませんでした。そして、教法を思い、時を考へ、自己を省みて如何にして法華經歸一の信仰を宣言すべきかを深く思いなやまれました。蓮長は遂に決意した。それは仏の使いとしての自覚に立つて、衆生を救い、仏国土建設のために法華經弘道に一身を捧げるといふ、大慈悲心から出た決意でありました。これを言えば身に迫害のふり來ることはもとより覚悟の上のことでした。

旭の森の唱題開宗のことは偽書と言われる本門宗要抄に出るところで、確な遺文には見えないようです。しかし大自然の中に立つて暗黒を打破つて鬼々と立昇る太陽に対して題目を唱えて開宗を宣言することは聖人の意気を表象するにふさわしい筋書のようにもおもわれます。



Handwritten signature and red seal in the bottom left corner.

(七) 持 仏 堂 説 法

法華經への純一の信心に生き、それを身心に実行することが、仏の御心にかかることであり、世のため人のためであるという確い信念に立たれた聖人は、身命を惜しまず、唱導の先達にならんと決意せられました。そして初めてこの法門を申し開かれたのが建長五年四月二十八日のお昼ころのことです。

弘安二年十月、聖人五十八歳のとき書きおくられた「聖人御難事」という御書（この御真筆本が、現在、千葉県中山の聖教殿にあります。）の冒頭に、つぎのように書かれてあります。

去る建長五年四月二十八日に安房国ながさ長狭郡の内、東条の郷、今は郡なり。

天照大神の御くりや、右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや、今は日本第一なり。此郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午の時に此法門、申しはじめて今に二十七年

また別に、清澄寺の大衆へ送つた御書にも、この日、道善房の持仏堂の南面にして浄円房並びに少々の大衆に申し始めたと書いて居られます。

仏は釈迦仏、経法は法華經がわれらの皈依すべきところであり、それ以外の仏やお経は枝葉である。根本を忘れて末節についてはならぬという趣旨の説法は聴く人の耳には素直に入らなかつたばかりか、反感をかい、地頭の東条景信はこれを聞いて殺意をいだいたと云われています。



三好



(八) 故山の追放

地頭景信の聖人に対する怒りは、ひととおりでなく、聖人を殺そうと計画しているという風評が立ちました。これを聞いては、師匠の道善房も致し方なく、その夜、夜陰にまぎれて、淨顯・義淨の二人の旧友に案内させて、道なき道を通つて間道づたいに清澄山から聖人を追放したと伝えられています。

年老いた師匠に仕へることもできず、懐かしい旧友に分れ、思い出多い故山の一樹一石もこれが見おさめとなり、靈驗を授けられた虚空藏菩薩に報恩の誦経を捧げる暇のなかつたことは心残りであつたでしょうが、聖人の使命は大きく、こゝでためらうことが許されませんでした。

教法に身を捧げる決意を固められた聖人も、人情を思うて人知れず涙を流されたことでありましょう。しかし、法華経を末法の人々に伝えることは並大抵のことでは出来ないことです。法華経には、この経は「如来の現在にすら、怨嫉多し、況や、仏滅度の後においては猶更のことである。」と説かれてあります。また法華経に、この経を弘める人には「三類の強敵」が現れるとあります。これはまた三類の増上慢とも言われる人達で、増上慢とは覺つていないのに証覚を得ていると思ひこんでいる人のことで、三類とは「俗衆」といつて在俗の人たちと「道門」といつて、出家した人たちと、「僭聖」といつて聖者のように見せかけてはいるが、内心邪悪の人たちのことで、この三類の強敵が正法を弘めるときには必ず邪魔立てをするということが説かれてあります。

聖人にとつては覚悟の上とはいえ、清澄追放は三類の強敵の中、俗衆増上慢の出現による開宗初頭の受難であつたのです。



三好
印

(九) 父母受戒

清澄山を追われた聖人は、山を下りて、西条さいじょうの花房村はなぶさにゆき、阿弥陀堂の開堂供養に一座の説法を請われたと伝えられています。

開宗を宴言した聖人にとつて、何よりも気にかゝることは両親のことでありました。仏教では四恩の第一に、父母の恩をあげていますが、特に聖人は孝養の念の厚かつたことは、書きのこされた文書の随所に見えており、また晩年、身延隠棲後も父母追恩のこまやかな心情がつたえられています。得度の地を追われ、故郷を去るにあたつて、子として父母への挨拶を述べ、恩を棄て、無為の世界に入つたものとして、後生ごじょうの導きを果して孝養に報いるために、聖人は小湊に両親を訪ねました。

清澄追放のことを聞いていた父母の心配はひととおりではありませんでした。しかし、今、親子相對して話し合い、法門の話聞いて見ると、吾子の語るところはもつともであり、今までの杞憂は晴れて、後生を子に導かれることに無上の喜びを懐かれました。聖人は開宗後、最初に父母の皈依を得たことを喜ばれ、改めて、父には妙日、母には妙蓮の法名をおくられ、聖人ご自身も蓮長を改めて、日蓮と名を改められました。

聖人は、日蓮と名のられたことについては、「明あきらかなること日月に過ぎんや、淨きよきこと蓮華にまさるべしや、法華経は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華経と名づく、日蓮また日月と蓮華との如くなり」と言われて、その名の出典を法華経にもとめられています。

父母の皈依を得、自ら戒師となることのできた聖人は、心おきなく正法を弘める態勢がと、のえられました。



Vertical calligraphy on a white banner, likely representing a sutra or a specific Buddhist text.

Red circular seal or stamp located in the bottom right corner of the illustration.

(十) 鎌倉辻説法

郷里において開宗の宣言をし、父母の入信を得た聖人は、故山を発つて鎌倉へ向われることになりました。この時の道順は、安房の西海岸の今の南無谷、そのころの泉谷から船で、東京湾を横切つて、今の横須賀、そのころの米ヶ谷に渡り、そこから鎌倉に出て、名越なごえの松葉ヶ谷まつばに庵をかまえて、こゝを鎌倉弘經の根拠地とされました。

松葉ヶ谷での第一期のご生活は、建長五年の後半から、正嘉二年、岩本実相寺の経藏にお入りはいになるまでの約五年の間のことです、最初の年には、此叡山に学んだ学友の威弁じようべんが松葉ヶ谷の草庵を訪ねて、聖人の弟子となりました。後に名を日昭と改め、聖人の有力な弟子の一人で、六老僧の中に名を列ねている人です。

聖人は、鎌倉の都で、法華經の積極的な布教を決意されました。庵室では法華經を説誦し、深い教理に思いを沈め、仏の教法と世相とを考へ合せて座視することのできないものがありました。聖人は決して一宗一派の開祖となろうとというようなお気持ちはありませんでした。願うところは仏のこゝろにかなうことであり、それはとりも直さず、法華經に皈一することでありました。念仏も禪宗も真言も、何れもそのよりどころとする経典も皈依する仏も時機不相応であり、その教法では入仏道はおほづかない。末法には法華經のほかに取り出すお経はなく、頼む仏は本師釈迦牟尼仏であるという、固い信念が慈悲心となつて外にあふれて、一切象生の未来の苦を救うための絶叫となり、聖人の辻説法が行われました。

伝えるところによると、鎌倉の目貫通りの近く、小町の夷堂えびすの側の広場で、聖人の辻説法が行われたということです。自宗の悪口と聞いて怒るもの、狂気の沙汰とけなすものもあり、また熱心な信者が現われるようにもなりました。此時代に四条頼基・進士義春・工藤吉隆・池上宗仲・平賀有国・波木井実長等が有力な信者となりました。



了
一
八



(十一) 実相寺での閲蔵

聖人が駿河の国富士郡岩本実相寺の一切経蔵に入つて、一切経を閲覽されたのは正嘉二年と正元元年に亘つてのこととされています。鎌倉での伝道を四ヶ年つゞけられて後のことです。

建長の年号は八年までつゞきましたが、八年の十月には康元と改められました。康元もわずかに五ヶ月しかつゞかず、二年三月にはまた正嘉と改められ、その正嘉の年号も三年目の三月には正元と改められ、正元の年に二年目の四月に文応と改元されました。

このように、聖人御年三十五のときに建長八年が康元と改元されてから、文応元年三十九の御年までの五ヶ年の間に、建長・康元・正嘉・正元・文応と五度の改元詔書が出されています。当時は不詳事が起つたりすると、そのあとを断つて、さらにそれが続かないようにとの念願から改元がなされたものですが、このような、たび／＼の改元が示しているように建長の末年からは、時ならぬ天災地変が引つゞいておこりました。とくに正嘉のころは大地震・火災・暴風・水害・長雨・早魃という天災を受けて飢饉・疫病が流行し、人も牛馬も道にたおれるという惨状だったのです。諸国の社寺では国土安穩の祈禱を捧げました。が災難はいよいよつるばかりです。当時のありさまは吾妻鑑に書かれており、聖人の遺文にも記されています。

国土の災禍を目のあたり見られた聖人は深く心に期すところがあつて、実相寺の経蔵にお入りになられたのです。すなわち正法の法華経を捨て、時代に適しない教法が行われているから、善神は国を去り、人心の乱れにつけ入つて悪鬼が災をおこすのであると見透されて、座視することができず、経文に照して世相を判定し、正しい方向を指示すべく、一切経の閲覧を執行されたのです。

末法の今の世は正法に依らなければ国家の安穩は期しえないと論じられた守護国家論は立正安国論の草案といわれていますが、此書は安国論上書の前年、正元元年の著作であります。



了翁



(二) 立正安国論の上書

立正安国論は聖人が幕府を諫めた第一声であり、三諫中の第一諫の書であります。岩本実相寺経蔵に一切経を閲覽してから三年目の文応元年七月十六日に、立正安国の論策の書を前の執権で、幕府の実権者であり、此書を呈する相手としてもつともふさわしい最明寺時頼入道へ上書すべく、聖人は時頼の近臣、宿屋左衛門光則に面会してその進達方を依頼されました。

立正安国論は、その真蹟が現に中山聖教殿に格護されています。この書は仮名文字は一字も使っていないませんが純粋な漢文ではなく、いわば鎌倉の時代文ともいふべきもので、四六駢儷体で書かれていますから語調の良い文章で力のもつた名文です。

内容は十段になつていて、客と主人の間答の形で筆が進められています。

旅客来つて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変地妖、飢饉疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半を超え、これを悲まざる族、敢て一人もなし。

これが、その冒頭の文ですが、このような調子で書き進められています。その趣意は、打ちつづく災難は、国王も国民も、正法法華経にそむいて邪法邪師に皈依し、ことに法然の選、釈集に迷わされて、念仏の邪法を信ずるところから、善神は国を去り、悪鬼が入つて来たために起つたものである、今にして国民が信仰を改めなければ災難を除くことができなればかりでなく、やがては国内の乱れと外敵の難が起ること必定であると、金光明経・葉師経・仁王経・大集経・涅槃経・法華経などの経文をよりどころとして論述され、結論として「汝、速く信仰の寸心を改めて実乗の一善に皈せよ」とすゝめられ、しからは三界はそのまゝに仏国土となり、その国は直ちに宝土となるであらうと結ばれています。これは聖人が仏弟子としての直言であり、経文に確証をもとめて得た不動の信念でありました。

立正安国論の予言が悲しくも事実となつて、内乱と外敵の難が文永・弘安年間にかかることになりました。



(三) 松葉ヶ谷の夜襲

立正安国論の上書は鎌倉の町に知れわたり、人々の話題の中心となりました。日頃、聖人の主張に反感をいだく人達は一だんとくしみを燃えあがらせました。念仏を信じ、禪に心をよせた時頼は、安国論の論説を直ちにとりあげて政治的に実現しようとする意志は全く示されませんでした。立正安国論はついに時頼の手もとに握りつぶされてしまつたのです。

末法には邪悪の教え、時機不相応の法として、その禁絶を宣言された聖人に対する反感は、念仏信者の間に急速に高まつて「日蓮を倒せ」という叫びとなつてひろがりました。

幕府がお用いのない法師はどうしようとおとがめのあろうはずはないと反日蓮の徒党のかり集めが行われたようです。その背後には法然系の宗観に受法した執権の大叔父にあたる極楽寺入道宗時の力も大きく動いていたとも見られています。安国論上書から四十日ばかりすぎた八月二十七日の真夜中に、松葉ヶ谷の聖人の庵室は数百数千の大ぜいの徒党によつて夜襲されました。

四大法難の最初がこの松葉ヶ谷の夜襲です。

この夜、聖人は庚申の法味をさゝげてゐられました。どこからともなく白猿が聖人を庵室の外へと誘い出すまゝに、裏山の山王社に出かけておられたために、この災厄を逃れることができたといわれています。

庵室には進士太郎善春が先頭に立つて暴徒に対し、能登房等もこれに従つて庵室を守ろうとしましたが、多勢に無勢で庵は壊され、住むに堪えないものとなつてしまいました。

聖人はこの時のありさまを下山御消息に次のように述懐しておられます。

国主の御用みなき法師なれば過ちたりとも科あらじと思ひけん。念仏者並に檀那等、又さるべき人々も同意しけるとぞ聞えし、夜中に日蓮が小庵に数千人押寄せて、殺害せんとせしかども、如何したりけん其の夜の害にも免れぬ。然れども心を合せたる事なれば、寄せたる者も科なくて大事の政道を破る。



了翁



(四) 若宮法華堂の布教

聖入外護の大檀那として名の高い富木五郎胤継たねつぐは字を常忍といつた人で、聖人より六才の年長で、一説には、聖人の叡山遊学時代の資援者であつたとも伝えられています。建長六年に法縁を結んだと見られています。

聖人は富木氏を信頼されて、後に佐渡へ流される途中、寺泊てらどまりから送られた「寺泊書」や佐渡から送られた大切な教義書の多くは富木氏を通して一門の人々に示されておられます。富木氏は後年、聖人の身延時代に入道して常修院日常と改名されていますが思うところあつて袈裟を着けず、終世居士をもつて任じたといわれていますが、学解も深く、聖人はこの人を信頼されていたことがうかえます。

富木常忍は下総しもふさ若宮に居住していましたが、鎌倉松ヶ谷での聖人の受難を聞いて、人を遣して聖人を下総の自邸に招請され、こゝに下総若宮を中心とする聖人の布教々化がなされたと云われています。

常忍は若宮の邸内に法華堂を建て、聖人は此処で百日説法をつゞけられ、近隣から多くの人達が聴聞に集りましたが、中でも曾谷教信、秋元太郎、太田乗明等は篤信の高名をのこした人々です。教信は後年身延に詣で、入道して名を法蓮日礼と名けられ、乗明は一子太郎を法弟としましたが、この人は常忍の妻の甥にあたる人で後に中老僧日高と呼ばれる人です。

聖人の霊跡であり、また御真筆格護の霊地として知られる中山の法灯の基礎には富木常忍とその一族の外護と皈依の力の厚かつたことを忘れてはなりません。



Handwritten signature and a red circular seal in the bottom left corner.

(五) 由井が濱の別れ

弘長元年五月十二日、松葉ヶ谷の夜襲の難から十ヶ月ほどすぎたこの日、再建された草庵に帰られて、鎌倉の伝道につかれてから間もなく、聖人は突然罪人として召し捕られ、由井が浜から伊豆の伊東へ流人としてのあつかいを受けることになりました。

この思いがけない受難は、時の為政者によつて決行されたのです。この辺の消息は「妙法比丘尼御返事」や「下山抄」そのほかの御書に書きしるされています。すなわち時の執権職にあつた長時は、聖人がはげしく批難された極楽寺良観の熱心な帰依者であつた極楽寺重時の子で、長時は父の意を汲んでか理不尽にも、一べんの取り調べもなく、いきなり流罪にしてみました。

聖人ご自身は、法華経を弘める者に難儀のふりかゝることは、すでに覚悟をせられており、門弟の人々にも迫害に負けてはならないことを常々教訓されておられました。聖人を敬慕する弟子信者の悲嘆はたとえようもありませんでした。

由井が浜の船出にあつたこの凶のような師弟別離の悲劇が伝えられています。この物語りは註画賛では急のことゝて日朗（当年十七歳）たゞ一人聖人のお供をして由井が浜に出て、どこまでもお供を頼み出たが役人に固く止められ、泣き伏して別れ悲しんだ時、聖人は唐に渡つた寂照が名ごりを惜しむ母をなぐさめた古事をあげて「月の入るを見れば日蓮伊東にありと思え、日の出るを見れば日朗此のはまにありと思ふべし」と言われて、たがいに袖をぬらしたと記されています。ところが、真実伝には描写が複雑になつて、浜辺には荏原・池上・進士等の人々が集り、日朗は比企谷にいたが急を聞いて素足で出船まぎわに駈けつけて、出船の纜ともづなにすがりついて声をがりに同船を嘆願したが、聞き容れられ、ばこそ、船人はこの邪魔ものとはかりに櫂をふりあげて日朗の右手を打ちくだし、日朗はしばらく気が遠くなつたが、やがて聖人の呼び声でわれに返つて浜辺を離れゆく聖人の姿を嗚咽おえつと共に法華経の要文を誦して見送つたとつたえられています。ともあれ、柱とたのむ師聖人と別れた日朗をはじめ鎌倉に在住する門下の人たちは手足をもぎとられたような思いで悲嘆にくれたことはお、いかくせないことでした。



(十七) 舟守彌三郎の救助

伊豆の流罪は、聖人御生涯中の四大法難の第二にあげられています。第一番目はさきの松葉ヶ谷の法難です。表面は流罪ということにして、裏ではひそかに亡きものにしよとの奸計がめぐらされていたと考えられるふしもあります。

ともあれ、伊豆での危機は川奈の名もない漁師だった舟守弥三郎によつて救われ、ひと月ばかりの間、弥三郎夫婦の供養をうけて川奈の海辺にすこされました。しかし流人をかくまうことは許されないことであり、とりわけ女房の心配は身にふりかゝる災難を思うてどうしたものかと案じたことは、ひととおりではなかつたようですが、目のあたり聖人に接して、崇高な人格と正法の教えを聞いて、心から聖人に帰依し、聖人をお守りする決心を固めました。

つたえるところによると、弥三郎の住居近くの岩屋に聖人をかくまひ、食事を給仕して供養を申しあげたと云われています。

翌六月二十七日付で舟守弥三郎に送られたというお便りには、並々ならぬ言葉をもつてその時のお礼を申しのべられています。すなわち、日蓮。五月十二日流罪の時、その津について苦しんでいるところを手あついはからいをうけたのはたゞごとゝは思えない。過去に法華經の行者だった人が今舟守の弥三郎と生れかわつて日蓮を助けたもうたのであらうか。ことに米の乏しい五月のころにもかゝわらず内々に給仕供養せられたことは「日蓮が父母の伊豆の伊東かわなと云うところに生れかわりたもうか」とも、「教主大覚世尊の生れかわりたまいて、日蓮をたすけたもうか」と述懐されているほどです。

三十二 工藤吉隆の殉死

小松原に殉教の血を流したのはお供の中の鏡忍房と今一人は、この日聖人を自邸に招請した工藤左近將監吉隆その人だったのです。

工藤吉隆は忠吾、忠内の二人の供を連れて聖人をお迎いにした矢先にこの暴挙に出合い、自分が聖人をお招きしたために景信に計られた責任を痛感し、聖人の身に万が一のことがあつては一大事と、多勢の中に切り込みましたが、衆寡敵せず、深傷を負うてあえない最後を遂げました。

聖人は吉隆の死を悲しまれ、とくに妙隆院日玉の法号をおくつてねんごろに菩提をとむらわれました。吉隆にはこの時遺腹の子がりましたが、遺志によつて後に聖人の弟子となり、刑部阿闍梨日隆と名のつて、父の殉教の地小松原に妙隆寺を建て、鏡忍房日暁を初祖とし、父日玉を二祖に、自らは第三世に名を列ねました。この寺は後に寺号を鏡忍寺と改めて今にいたつています。現在の天津日澄寺はもと工藤家の菩提寺で真言宗だつたのを日澄がときの住持と法論して改宗せしめたところから寺の名を日澄寺とつけられたといわれています。日澄寺にもこの二人の殉教の霊がまつられております。

聖人は小松原の難に「頭に疵をかうむり左の手をうちおらる」と述懐せられているように文字通り刀杖の難をお受けになり、身をもつて法華経の经文を行ぜられました。東条景信は「法華経の十羅刹のせめをかうむつて早々に失せ」と書かれているように、このことがあつて間もなく狂死したということです。



三岩



(二十二) 蒙古の使者来牒

文永五年(聖寿四十七)正月、そのころ大陸に武力をふるつて東西に国威をのぼしていた蒙古王忽必烈の使者黒的が国書をもつて太宰府にやつてきました。これよりまえ、文永三年に蒙古は高麗を通してわが国をしたがえようという気配があつたのですが、ついにこの年に至つて直接の使者到来となつたのです。

これに対して、二月には朝議のすえ、蒙古の牒状はわが国を侮つたものであつたために、返牒しないことに議決されました。しかしこの態度に出るからには、蒙古の襲来を覚悟せねばなくなり、二月末には幕府は讃岐国の家人に対して蒙古人の襲来に備えさせることになりました。大蒙古国が小日本国を攻めるといふ容易ならぬ情勢に立ちいたつたのです。

日蓮聖人は先きに上書された立正安国論に外敵の襲来を予言されています。すなわち今にして仏法の邪正をたださずして法華経の信心を確立しないならば、金光明経や仁王経に説かれている他国から攻められるという大難の起るのは必定であるということです。この予言が安国論の上書からかぞえて九年目に、直面の事実となつておそいかかつてきたのです。聖人は文永六年に安国論奥書を書かれて、現状が勘文に叶うことをのべられて「この書は徴^{しるし}ある文なり、これ偏^{ひとえ}に日蓮の力にあらず、法華経の真文、^{かんのう}感応の至す所なるか」と述懐されています。

蒙古の来牒は法華経の正信を確立することの急務であることを教える一大警告にほかならぬと痛感された聖人はこれを機会に八月と九月に幕府に書を送つて詰問されたようですが、それに対する反応は示されなかつたようです。そこで十月十一日に執権時宗をはじめ宿屋入道その他の為政者および建長寺道隆、極楽寺良観等の十一ヶ所に書を送つて、時局対策の根本方針についての公場対決を申しられました。これに対する聖人のお覚悟はもとよりのことですが、弟子信徒にも書をおくつてふかく訓誡されるどころがありました。



(二十三) 雨のいのり

文永八年（聖人五十才）春から夏にかけて、日照りがつづいて大旱魃かんぱつとなりました。水は涸かれて作物は生長せず、悪風吹いて砂塵をまきあげ、人々は雨の降るのを千金のおもいでまち望みましたが、空には雲さえ見えぬ目がつづきました。

持律堅固の名僧とうたわれた極楽寺良観が六月十八日から七日の間、一山の大眾をひきいて雨請いをする事になり、人々の期待は大きくこれにかけられました。聖人はこの雨請いを機会に良観との対決を申込まれ、もし七日のうちに良観の祈りが叶うて雨が降れば日蓮は良観の弟子となつて持律者に転向しよう。しかし降らなければ良観の持戒は真の仏法ではないことを表明するのにはかならない。よつてこの旨を、周防房と入沢入道という念仏者に云いふくめて良観に伝えさせました。

ところが七日をすぎても一滴の雨も降らばこそ、ますます日は照り八風吹きささむというありさまでした。七日の祈りはさらに七日つづけられ、十四日に延長されましたが、遂に良観の雨請いは反応なくおわりました。聖人は書を送つて再三これを難詰されました。良観は涙を流し、弟子や信徒は声をあげて口惜しがつたと記されています。

良観が雨請いをした後に、聖人は七里ヶ浜の田辺が池のほとりて雨をいのつて法華経誦誦されると、今まで吹きすさんだ風は止み、感応たちまちに表れて旱天に雲をよび、慈雨が降りそそいだと云われています。



木下尚江

(二十四) 八幡社頭の諫言

聖人には微塵の私心とてなく、仏法の邪正をただし、時とところに適応した教えを弘めて人心を安んじ、国を泰らかにしたいとねがうほかには何もものなかつたのです。「法華経の行者」、「仏の御使い」ということはここから発せられたことほであり、意表をついた八幡の諫言も聖人のこの立場から出たものです。

これよりさき、かねてから聖人に敵意をいだいていた念佛者その他の徒党の計略にうごかされて、九月十二日(文永八年)の昼すぎものものしく物の具に身を固めた平ノ頼綱のひきいる捕吏の一群が、あらあらしく松葉ヶ谷の庵室をとりかこみ、おりから法門談義中の聖人を罪人として召しとらえました。このとき聖人は所持の法華経の第五の巻で打たれたことについて、「刀杖を加える者あり」と書かれた巻五をもつて打たれたことは、いま身をもつて法華経を読むものであると、法悦の涙を流されました。難を受けて聖人の信念はいよいよ堅く、平ノ頼綱にむかつて「只今、日本国の柱を倒す」と喝破されました。幕府の評定は内々聖人を極刑にしようと思われていたのです。公廷に引出されて形ばかりの詮議をうけましたが、それは真相の究明ではなく、予定の筋書どおり表面遠島ということにして、途中において亡きものになしようとたくらまれていたのです。

九月十二日の夜、聖人は裸馬にのせられて刑場に引出されることになりましたが、その途次、八幡社頭にさしかかつたおり、聖人は馬をとめて社殿にむかい、法華経守護の神である八幡大菩薩がいま法華経の行者の危難に靈験を示さぬは何ごとか、「いかに八幡はまことの神か」と故事を列ねて、叱咤諫言せられました。衛護の士卒はその意気におそれて、ただ呆然とするばかりでした。「法に依つて人に依らず」の聖句が思い合わされます。



丁卯
三

(二十五) 四條金吾との対面

聖人に帰依した武士の中でも、四條金吾は終生、法華經の信心を身に行つた人で、す。そのために人生の難関にぶつかつたこともありましたが、そのようなおりに、処世の道を聖人にたずね、聖人はねんごろに書を送つてこまやかに指導されました。聖人も四條金吾を厚く信頼され、翌九年に佐渡にあつて心血をそそいで書きとめられた、一代の重要論策である「開目鈔」は四條氏にあて、送られたものです。

九月十二日夜、表向きは流罪というものゝおだやかならぬ氣配をはらんで鎌倉の街を引き廻された聖人は、八幡宮前から、由比ヶ浜を西に向い、長谷にさしかかりました。おりからこの地に住んでいた四條金吾兄弟四人は、聖人の危難に驚いて駆けつけ、聖人の変つた姿を見て悲しみの涙にかきくれ、金吾は腹切つて殉死の決意を固めました。聖人はそれをとがめられ、受難の法悦とその心がまえを訓誡せられました。

種々御振舞書には、道中で警吏のゆるしをうけて熊王を金吾の邸に遣されたと書かれています。そして悲嘆にくれる金吾に教誡されて「日蓮、貧道の身と生れて、父母の孝養心に足らず、国恩を報ずべき力なし、今度頸くびを法華經に奉りて、その功德を父母に回向し、その余をば弟子檀那にはぶくべし」とのべられています。

死に直面された聖人が、親を思い、国を案じ、弟子、檀那への心遣いと法華經に身をさゝげられた決意こそ聖人の平常心にほかなりません。

その尊い心事に感銘をおぼえずにはいられぬものがあります。



(二十六) 牡丹餅供養

由比ヶ浜から極楽寺切り通しをすぎ、七里ヶ浜を通つて、竜の口へと夜の道を馬上に身を運ばれる聖人は、まことに法華經の行者の化身と申すべきです。

「われ身命を愛せず、但だ無上道を惜しむ」という法華經の文字を身をもつてお読みになつたお姿であり、身はしたがえられても、心はしたがえられずというご心情であつたと拝察することができます。

伝記には、竜の口への道中で貧しい老婆が聖人に最後のお供養にと牡丹餅の供養をさゝげたという物語りが伝えられています。

眞実伝によると、七里ヶ浜をすぎた津村の村はずれに住んでいた一老婆が、先年鎌倉で聖人の説法を聞いて感銘し、それから朝暮にお題目をとなえる身となつていたりかゝつたが、心せくほどに小豆は煮えず、時はせまつて詮方なく、あり合せた胡麻をとり出して、餅にまぶし、盆をとり出す暇ももどかしく、鍋ぶたの上に餅をならべて、おりから通りかゝつた馬上の聖人に、足もともたどしく駆けよつて、涙ながらにさしあげたところ、聖人は厚くその志をお受けになれたと云われています。

九月十二日の御法難会に牡丹餅または胡麻餅を供えるのはこれに由来するのです。



(三十) 佐渡の三昧堂

文永八年十月十日に依智を立たれた聖人は、泊りをかさねて同月二十一日に越後寺泊てらどまりに着かれ、順風を待つて翌十一月二十八日に佐渡の松ヶ崎にお着きになりました。二十九日に松ヶ崎から新穂の本間六郎左衛門重連の邸に入られ、十一月一日に本間重連邸のはるかうしろの塚原という山野の中の死人を葬るところにある、一間四面のくちはてた三昧堂を住居として与えられました。翌年四月、一ノ谷いちさわに移るまで、約半年の間、聖人は三昧堂でのあけくれを過されました。「空は板間合はず、四壁はやぶれたり、雨は外の如し、雪は内に積もる」という堂内で、聖人は持仏の釈迦像を立てまいらせ、蓑をきて日夜を過されました。

開目鈔二巻の大作や、佐渡御書など、重要な論策は、この三昧堂でお書きになられたものです。

当世、日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし

とは、開目鈔の一節ですが、寒さと飢えに身をおかたれこの声は、凡情を超えたものであることは、同じく開目鈔のつぎの句かえるとしにうかがうことができます。

此は魂魄佐渡の国にいたりて、返年かえるとしの二月雪中にしろして、有縁の弟子へをくれは、をそろしくてをそろしからず。みんないかにをちぬらん。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給フ明鏡なり、かたみともみるべし。」
我レ日本の柱とならん。我レ日本の眼目とならん。我レ日本の大船とならん、等とちかいし願、やぶるべからず。

この力強いことばは、「仏使日蓮」、「法華経の行者日蓮」の自覚がなくてはありえないところす。

佐渡でのご生活は、聖人にとつて人間的にも、また精神的にも、内外に重要な転換をもたらされ、新生面を展開せられる機縁となつたことは聖人ご自身が、これを述懐せられているところす。



了
雪



(三十一) 阿仏房夫妻の給仕

阿仏房は遠藤為盛といい、もとは順徳上皇に仕えた武士で、上皇のお供をして佐渡に來り、上皇崩御の後は、夫妻ともに入道となつて真野の御陵の側に居住して御菩提をとむらい、念仏三昧に日を送つていたところから、人よんで阿仏房といい、妻を千日尼とよんだと伝えられています。

聖人が塚原三昧堂に配流されたことを知つた阿仏房は、日ごろ信仰する念仏の法敵日蓮を生かしておいてなるものかと、聖人との対決を決意し、殺意をもつて三昧堂に出かけました。

三昧堂で聖人と相對した阿仏房は、聖人に説き破られ教えを聞いて、たちまちに念仏を捨てて、法華經の信仰に改宗する身となりました。

それからは、阿仏房は深く聖人に帰依し、妻の千日尼も心を合せて聖人を供養しました。塚原と真野の間の一里をこえる遠路の道を、阿仏房は深夜に妻千日尼が心をこめた糧食を背に負うて、寒夜の風雪をいとわず往復する日がつづきました。国府入道夫妻もこのころから聖人を供養する人となつたと見られています。これらの人々の厚意によつて聖人は飢え死ぬこともなく、一層深く法義を探究せられました。

のちに聖人が身延にお入りになつてからも、阿仏房は九十に近い老齡の身をもつて、千里の道を遠しとせず、三度までも身延に聖人を訪れましたが、その都度、聖人は千日尼に書を送つてその厚志を感謝されています。阿仏房夫妻の帰依の情がいかに厚かつたかがしのばれます。



Handwritten signature and a red circular seal in the bottom right corner.

(三十二) 塚原問答

聖人が塚原三昧堂で、佐渡配流第二年目をむかえた文久九年正月十六日には、念仏真言そのほか諸宗の法師ら数百人が塚原の堂の周辺におしかけました。

念仏・真言者らの間には法敵日蓮が佐渡に流されてきたのをこのままに見すごしてはならぬという意見が強くおこつていたようですが、遂にそれが爆発したのです。これまでこの国に流されたもので、生きながらえるものはない。かりに生きながらえても、この国から帰るものはない。打ち殺してもおとがめはなからう。このまま放つておいては安らかでないから、何とか手段を構じようではないかとの義が佐渡の諸宗の人たちの間に直面した議題となつたのです。本間六郎左衛門のもとにこのことを如何にはからうべきかを問うたところ、幕府からの副状があつて、日蓮にもしもあやまちがあつては、役目の落度ともなることであるから、勝手な振舞があつてはならぬと誠にめられ、ただ一つの方法としては、法門の問答によつて攻めおとすことを許されました。

この日集るものは、佐渡国はいうに及ばず、遠く越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々から来たものです。本間六郎左衛門は兄弟一家を引連れて警固にあたりました。近くの百姓や入道も聴聞に集まりました。

多勢の念仏者は、日蓮を悪口し、真言師は顔色を変えて憤り、天台宗が勝つなどとさわぎたて、その騒騒しさは「さわぎひびく事、震動雷電の如し」と書かれています。

いよいよ名乗りをあげての門答となると、鎌倉で一流の字僧を論破せられた聖人に對するのですから、一言二言で説破されて「利劍をもて爪をきり、大風の草をなびかすが如」きありさまであつたと書かれています。

かくしてこの日はすこすこと無為に引きあげましたが、翌十七日念仏者の旗頭であつた印性房が問答を申入れました。『法華浄土問答鈔』がその記録であるとされています。



(三十三) 真野御陵参拜

佐渡は新院とよばれていた青年期の順徳上皇が承久三年に配せられたところだ。

上皇が佐渡に遷されたのは聖人ご生誕の前年のことでしたが、上皇は二十年の在島生活を送られて仁治三年(一二四二)九月に崩御せられました。

聖人が佐渡に流されたのは上皇が崩御せられてから約三十年をすぎた頃のことです。聖人は承久の乱に三上皇を配所におくつた幕府のやりかたを下剋上であるとはげしく批難せられていることでもあり、今聖人ご自身もまた上皇配所の地に流罪の生活を送ることはひとしお感慨を深くされたことと想像せられます。

塚原から真野の上皇の茶毘所までは往復に数時間を要する距離でもあり、また流罪の身で自由な外出がゆるされていたかどうかとも考えられ、真野陵参拜のことは定かな事蹟とは云えませんが、同じ配所の月を眺められた聖人は上皇のご生涯に心をよせられて、追善のご回向はたびたびなされたこととおもわれます。



(三十四) 一の谷庵室

佐渡に流されて半年足らずを人の住居とも思えぬ塚原三昧堂で過された聖人は、文永九年(一二七二)四月はじめに一の谷のある入道の邸に移されることになりました。聖人はここで文永十一年三月に赦ゆるされて鎌倉に帰るまでのまる二ヶ年を送られました。このころから信徒の送りものがとどくようにもなり、海を渡つて聖人を訪ねる信者もありました。四条頼基や「日妙」の名をおくられた特信の婦人などが聖人をたずねた人たちです。

一の谷入道一家の人々も聖人の風格に接して、感化をうけ、入道は内心に皈依しながらも改宗するにいたりませんでした。女房は聖人の信者となりました。近隣の人々も聖人に好意をもつものが多くなり、近くの中興なかおきに居住した中興入道も熱心な皈依者となりました。しかし反面には聖人をにくむ人たちも居て奸策をめぐらしましたがそれは表面化せずにおわつたようです。

文永十年四月には「日蓮身に当つての大事」といわれた『観心本尊抄』を書き著わされて、さきの『開目抄』につづいて大事の法門を述べられて、末法の今の世にふさわしい教法とそれを弘める人について説かれています。その年の七月には大マンダラを書きあらわされたとつたえられています。このようにして聖人の佐渡三ヶ年の流罪生活は、ご自身の宗教を確立し、証明された大切な時期となつていきます。



(三十五) 第三の諫言かんげん

佐度流罪の赦免状しゃめんじょうは文永十一年(聖人御年數え年五十三)三月八日に日朗がこれを持って佐度に着き、流罪を許された聖人は十三日佐渡を發たつて三月二十六日に鎌倉にお入りになりました。

幕府では四月八日に聖人を召し出しましたが、このたびは従前の態度とは、うつつ変った町重な扱いで、平の左衛門尉は「あなたは蒙古が襲来するといわれるが、それは何時のことか」と問いました。聖人は「経文には年月を明示されていないが、天の御氣色けしき少からず見えているから、今年をすぎることはないと思う」と答えられました。

伝えるところによると、時宗はこの時聖人に蒙古の調伏を請い、愛染堂を城西に建てて別当とし、千町の田を付けるから、国家の安泰を祈つてほしいと申し出たが、自ら正法に帰依することが第一条件であるとして聖人はこれを受けなかつたと云われています。

この国土に生を受けたものとして、身体は掟に随えられても、心は随えられるべきではない。邪法、邪師に頼ればいそいで国が滅びるであらうと、聖人はここに三たび立正安国を説いて幕府を諫言せられました。これが第三の諫言です。第一の諫言は文応元年七月十六日立正安国論を上書されたとき、第二は文永八年九月十二日に平の左衛門尉に対して日本国の滅亡を諫言されたときのことを云います。



三好
印

(三十六) 身延入山

「仏の使い」、「法華経の行者」の自覚から出た聖人の、三度におよぶ命がけの諫言も、幕府の聞きいれるところとなりませんでした。

そこで聖人は、やむなく鎌倉から身を引くことを決心され、五月十二日に鎌倉をあとに甲斐の波木井実長の好意を受けいれて身延に向われることになりました。身延入山の理由については三度諫めて聴かれずは、すなわち去るということばによられたとも、あるいは蒙古来襲にそなえるためとも、弟子信徒を養成して正法を後の世につたえるためとも云われていますが、聖人の入山を凡情から推し測ると、世間的にも人間的にも一抹の淋しさを感じさせられるものがあります。

身延入山の道筋は、五月十二日は鎌倉から藤沢、大磯、国府津を過ぎて酒匂に、十三日は足柄を越えて駿河路に入つて、竹の下に、十四日は黄瀬川に沿つて車返しに、十五日は沼津から吉原を経て富士の大宮に、十六日は富士川に沿つて甲斐に入つて、南部にと宿りを重ねること五泊、十七日に聖人の一行は実長に迎えられて身延にお着きになりました。身延は波木井（富士川の西岸、南部の北）からは西南四軒ばかりのところにあつて、南に鷹取山、北に身延山、東は天子ヶ嶽、西に七面山がそびえ立つという四方に四つの山をひかえ、この山をめぐつて富士川、早川、波木井川、身延川の四つの流れがあり、その四山四川の中の手の広さほどの平地に庵室を結んだと、その光景を述べておられます。



(三八) 遠藤盛綱の孝養

遠藤藤九郎盛綱もりつなは阿仏房夫妻の子で、両親の信仰を受けついで聖人に皈依し、生涯を信仰生活にささげ、佐渡から北陸方面にかけて布教をつづけた人です。

盛綱の父阿仏房は、聖人身延ご入山の後も、妻千日尼にはげまされて、佐渡から甲州までの海山を越えての遠路を、九十に近い老軀をいとわず、三度も往復して懐しい聖人にお目にかかり、信仰を高め、心情を温めることを喜びとし、その都度聖人も千日尼が心づくしの供養の品々に佐渡の往時を追懐されて胸にせまる思いにむせばれるのでした。阿仏房が三度目に身延の山に聖人を訪れたのは弘安元年九十才の時でしたが、阿仏房はもう高令のこともあり、いよいよ今回が生きて最後の御対面と名残りを惜しむと共に、老先き短いわが身の死後は、せめてもわが骨を聖人のおそばに埋葬することをお許しねがいたいとの悲願を懐いて山を下りました。

弘安二年三月二十一日、阿仏房は九十一才で亡くなりましたが、その悲願は一子盛綱によつて果されました。満中陰をすませ、百ヶ日を期して盛綱は母千日尼に送られて父の骨を首にかけて身延山へ埋葬の旅につきました。七月二日に身延の山で聖人のねんごろな回向を受け、身延に骨を埋めて、そこに墓を建てました。聖人はこのとき佐渡の千日尼に手紙を書かれて尼御前をなくさめられ、子にまさる宝たからはないと盛綱の孝養をほめられました。



(四十) 父 母 追 恩

仏道に入つて出家するひとは、世間のきずなを絶ち、「恩を棄てて無為に入るとはまことの報恩」のためであり、特に父母の重恩のことは、四恩のはじめにあげられているところである。世の徳目として第一条件とされているところである。

法華経に一身をささげ、正法を弘めることに急がしく、世間的な孝行をつくせなかつた聖人は、「父母の孝養心に足らず」と申されながら、波乱の多かつた生涯の中で、喜びにも、悲しみにも、父母の慈愛と、追懐の情を持ちつづけられました。配所で聖人を守つた人たちには、父母の生れかわつて日蓮をはぐくまれるのであらうと云われ、また、今生ではわが命にも変えがたい父母の生命を、たとえ絶ち切ると云われても、法華経の信心は捨てられないと、決意を示す言葉に引き合されているほどです。

信徒から供養された海苔を見ては、故郷を思い、父母を追懐された聖人は、身延に入られてから、朝座、夕座の廻向は言うにおよばず、時には、五十丁の山道を踏み分けて、はるかに東の空を見通す山頂に立つて、房州小湊に骨を埋める両親を懐かしみ、心ゆくまで追孝の情を致されました。奥の院の思親閣が、その故地として今に伝えられているところです。



(四十二) 御草庵の改築

文永十一年、聖人が身延にお入りになつてから、かぞえて八年目の弘安四年十一月、聖人御年六十歳のときに、草庵が改築されました。

もとの草庵は、四年目に一度倒れたのを修復しましたが、それも今ではもう朽ちちてて、これ以上住むにたえなくなつたからです。

改築された草庵は、前の三間四面よりは、ずっと広く、十間四面の大坊が建られました。大坊の柱建ては、十一月八日に挙行され、十日には屋根葺きが終つていまずから、人夫と大ぜいで取りかかつたようです。この大坊を中心にして、小坊があり、馬屋うまやも作られました。小坊と馬屋は十一月一日に先きに作られ、つづいて大坊が建てられました。このころは身延に聖人を慕したつてたずねる人が次第にふえて、毎日二三十人も人が集まるようになり、とうてい、もとの小庵では収容しきれなくなつて、十間四面の大坊の建築となつたものです。

十一月には、二十四日の大師講を改築の出来上つた新しい坊で、つとめられました。が、この日と前日の二十三日は天気もよく晴れわたつてふかい雪におおわれた後ろの山々を背にした身延の沢に、大ぜいの信徒が参詣して「人のまいること洛中、鎌倉の町の申酉（夕刻どき）のごとし」と書かれていますから、大そうなにぎわいだつたことが相像されます。そして、大師講には三十余人のひとたちが集まつて、新築の坊内で法華経の「一日経」書写の供養がおこなわれました。

この坊が、身延山久遠寺のおこりとなつたところ です。



(四十三) 身延から池上へ

身延入山後の聖人は、建治二、三年ころから弘安元年にかけて、身体がめつきり衰え、慢性の下痢になやまされました。一時は、定業かと云われたほどの下痢も、四糸金吾の調薬で回復されましたが、二、三年後にはまた食慾がなくなり、肉は落ちて、寒さが厳しく身にしみるようになりました。弘安四年十二月のお便りには『このようなひどい寒さは、生れてはじめてのことです』と書かれています。

身延在山九ヶ年の間には、法華経読誦の自受法樂のひと時や、弟子を相手に法門談義の時を過されましたが、また、おりにふれて信徒の人たちに遺された書簡は、不滅の遺訓としてかがやいています。聖人の肉体は年と共に衰弱されました。弘安五年の秋には、この年の冬を身延で過すには堪えかねることを案じた波木井氏や、その他の人々のはからいで、その年の九月八日に、秋色ふかい身延を発つて、常陸ひたちに湯治されることになり、道中、波木井氏の子息や若衆に守られて、ひとまず、武州池上の宗仲に向われることになりました。

身延出山の道筋は、富士山を北にまわつて八日は下山、九日は大井の郷、十日は甲府の曾根、十一日は黒駒、十二日は河口湖畔、十三日は吉田口下の呉地くれじ、十四日は足柄の竹の下、十五日は相州関本、十六日は平塚、十七日は瀬谷せに泊りを重ね、十八日に池上に到着、宗仲の家に旅装を解いて、休養されることになりました。



丁
卯
年



(四十四) 聖人の御温情

正法をひろめ、国家社会の安泰と人心のよりどころを示された聖人は、権勢に屈せず、迫害におそれぬ剛毅な反面に、人の悲しみに泣き、人の苦しみに胸をいためるといふ、こまやかな温情の持ち主であられたことが、弟子信徒に遣わされた書簡に、それをはつきりと、見うけることができます。弟子や信徒への思いやりばかりでなく、処生上の指導や、日常の生活態度や心のもち方にいたるまで、こと細やかに注意をされたり、子に先立たれた母には、まづ、悲しみを共にして泣かずにはいられないという御気性が、たびたびの書簡に、それをうかがうことができます。

聖人は、身延から池上に着いて、波木井氏へ送られた礼状が最後の書簡となつたのですが、短い書簡の後半をついやして、最後の旅の乗馬への愛情が綿々と書かれています。『つけていただいた栗鹿の馬はあまりに可愛いので、いつまでも失わないようにいたしましょう。常陸の湯へも、引かせてまいりたいと思ひますが、もし、人にとられてもいけませんし、また不憫でもありますから、湯から販りますまで、上総の藻原の殿のところへ預かつていただくと思ひます。それにしても、知らない舍人(馬丁)をつけておくのも覚うございますから、販りますまで、この舍人をつけておきたいと存じます。このようにご承知を願います』と、ありますように、聖人の温情は乗馬にまでおよぶ、こまやかなものであります。

大石月谷
天竺神
拜寺堂
日蓮



天竺神

池上で床につかれた聖人の病状は、弟子信徒の熱心な再起の願いも空しく、十月に入つて病重く、ついにご自身も定命を覚悟せられるところとなりました。

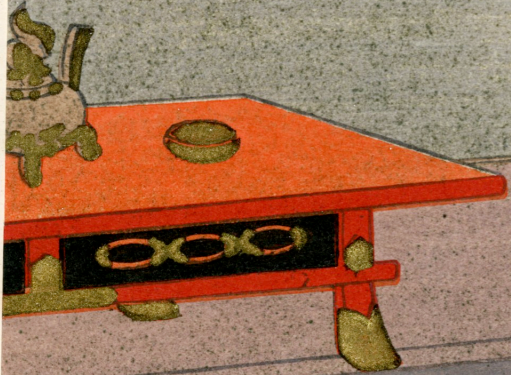
聖人は病床にあつて、衆を集めて立正安国論の講義をせられ、十月八日には六人の弟子をあげて、これを「本弟子」と定められました。後に六老僧とよばれる日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の各上人がその選にあげられた人たちで、正法弘通の後事を、これらの人たちを中心に行うようにと遺囑せられました。

聖人が臨終の床にあつて、弘教のご生涯を回顧せられて心に残ることの一つは帝都の弘教ということでした。聖人はこの遺業を果すために、日朗の弟子として入門していた、十三歳の少年経一磨の法器を見込まれて、枕辺に呼びよせられ、経一磨の手をとり、頭をなで、精進修行を怠らず、帝都への弘教をねんごろに遺囑せられました。

後の日像上人が、この時の経一磨で、上人は遺囑を奉じて、先ず、どのような苦難にも打ち克つために、並々ならぬ苦修練行の末、帝都の弘教に向い、永仁年間には、遺命にむくいる業績をあげられ、帝都弘教の祖と仰がれました。

異体同心に、二陣三陣と日蓮につづけ、とは聖人の日ごろの教訓であり、今に変わぬおことばですが、今日の教団には、これらの先師方の血が承けつがれており、これから後も、この精神は継承されなければならぬところです。

大空目録
天竺天神
社本堂
日蓮



丁卯
日蓮

(四十六) 御 齒 の 授 与

敬慕し信頼する人を失うことは誰にとつても堪えがたいおもいであることには変わりありません。舍利をまつり遺骨を拝するのは故人をしのび、心にかようすがであります。まして聖者のそれに対する場合は、また格別です。

日蓮聖人のご入滅にあたっては、六老僧をはじめ、弟子や信徒の人々に遺品の配分がなされました。弘安五年十月には日興上人が筆をとつて、その品目と配分された人たちの名が書きしるされている「御遺物配分の事」というのがあつて、それによると聖人が御自筆で所持の法華経に経論の要文をお書き入れになつた「註法華経」は嗣法の弟子日昭に相伝されましたが、この教義学上もつとも大切な品を受けついだ日昭は、さらに聖人ご存命中に、生き形見ともいふべき品を授与されています。二粒の御齒がそれでありませう。

日昭上人自書の記録によると、聖人ご在世のおり、聖人の御齒二粒を直々に日昭が頂いたことが書かれてあります。聖人なきのちも日昭は生身の聖人に接する思いでこの御齒を拝しつづけ、付法の弟子日祐に誠告して、日昭の法脈を継ぐものは末永く、この御齒を生身の聖人と思つて拝すべきことを遺訓されています。

浜はまの法華寺は日昭の開いた法華の道場でありましたが、後にこれが玉沢に移されて現在にいたっています。



(四十七) 非 滅 現 滅

日蓮聖人は弘安五年(一二八二)十月十三日辰たうの刻(午前七時(九時)、数え年六一歳の尊いご生涯を終えられました。このとき庭前の桜が、ときならぬに花を開いたと伝えられています。

送葬の儀は、弟子信徒の悲しみのうちに、池上で行われ、十五日夜、茶毘だびの行列は松明まつまつの明りを先頭にして、四条金吾、池上宗仲、富木入道、太田入道、南条七郎、大学三郎などの人々が、幡、香、鐘、散華、御持経、御書、御持仏、杵を棒持して棺前に進み、遺骸の御輿こしは日朗と日昭が前と後に入つて肩にかけ、日興、日向、日頂、日持の弟子たちが左右に手をかけて茶毘所に運ばれ、夜半に火葬せられました。十六日に遺骨を取め、二十一日に池上を出発して遺骨は二十五日身延に送られ、中陰の供養をすませ、百ヶ日にあたる弘安六年正月二十三日に、新しく造つた廟所に納められ、六老僧は山中に房を構えて、輪番で廟所に奉仕する制度がつくられました。

日蓮聖人には立正安国論のような論策書、教義を説かれた論著、そのほか弟子信徒に書き送られた訓誡の書が数多くあつて、それが今に伝えられています。そして、それらは皆、聖人が身をもって説かれた法華経の教えであり、それはそのままに現代に生きる聖人のご精神であり、いつの時にも、わたくしどもの指針となり光明となつてかがやいています。